

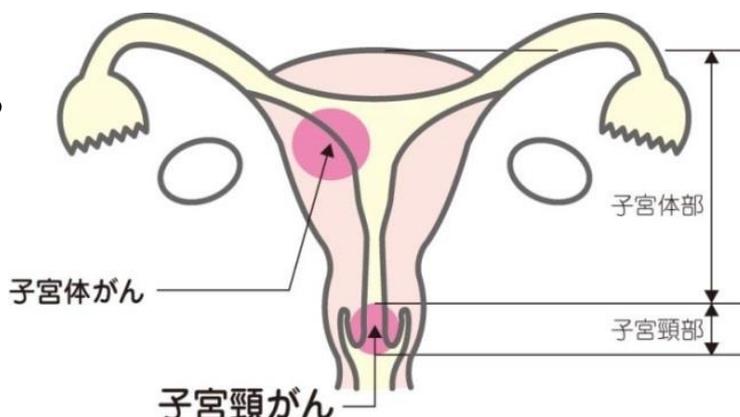
子宮頸がんは、定期予防接種で 予防することができます

～子宮頸がんと予防接種について正しい知識を知りましょう～

子宮頸がんは、子宮の入り口部分（頸部）にできるがんです。

子宮頸がんは主に20歳代以降の女性に多く発症し、ほとんど自覚症状がなく、気づきにくい病気です。発症すると妊娠や出産に影響が出る可能性があります。

子宮頸がんが進行すると・・・
○生理に関係のない出血がある
○茶色のおりものが増える
○下腹部や腰が痛む
などの症状があります。



**20～30代の若い女性に子宮頸がんが増加しています。
また、出産年齢のピークと重なっています。**

- ・日本では、毎年、約1万人もの女性が新たに子宮頸がんと診断され、子宮頸がんが原因で約3千人が亡くなっています。
- ・女性のかかるがんは、「乳がん」が多いイメージですが・・・

20～30代の女性では「子宮頸がん」が、1番多いがんです。

- ・妊娠・出産年齢のピークが重なることが知られていて、その後の妊娠・出産にも影響が出ます。その他、小さい子どもを残して亡くなってしまふなど、マザーキラーとも呼ばれている恐ろしい病気です。

子宮頸がんの原因は、ヒトパピローマウイルス（HPV）です。

ヒトパピローマウイルスは、ありふれたウイルスで性交渉により感染します。女性の約8割が50歳までに感染を経験するといわれており、通常は感染しても自然に排除されますが、長い感染が続いた場合、細胞が少しずつがん細胞へと変化することがあります。

20～30代で発見される子宮頸がんは8～9割が16型・18型です。

150種類以上のウイルスの型がある中で、15種類程度が高リスク型です。代表となるウイルスは、16型と18型で、子宮頸がんの原因の内、約65%を占めています。

子宮頸がんワクチンを接種することで、子宮頸がんの原因の割合が高い16型・18型の感染を予防することができます。

定期接種の対象年齢（自己負担なく受けることができます）

- ・小学校6年生から高校1年生までの女子 ⇒ 標準的な接種年齢は、中学1年生

ワクチン接種スケジュール



メリット

- ・主な原因ウイルスからの感染を予防することができます。
- ・定期接種対象年齢の間に接種を受ければ、1回あたり約1万6千円（3回で4万8千円）を自己負担なく受けることができます。
- ・全3回の接種を完了すると、10年前後あるいは10年以上の一定期間の効果が持続すると言われています。
- ・妊娠・出産適齢時期という大事な時期に、子宮頸がんの発症を予防することができます。

デメリット

- ・痛みの伴う注射を3回接種しなければなりません。
- ・ヒトパピローマウイルスは150種類もあるため、予防接種をしても、100%感染を防ぐことはできません。

ワクチン接種による副反応である、「失神・痛みなど」について知ってください。

★子宮頸がんワクチン接種だけでなく、他の予防接種でも同等の頻度で副反応が発生します。

痛みについて

ワクチンを接種した後に、8割～9割の頻度で注射した部位のはれや痛みが、報告されています。これは体の中でウイルス感染を防御する仕組みを作るために起こる症状で、そのほとんどは、数日間程度で治まります。

失神について

注射の痛み、恐怖、興奮などの様々な刺激のために、心拍数や血圧が低下して、失神が起こることがあります。ワクチン接種による失神は思春期の女性に多いといわれています。注射への恐怖心が強い人は事前に医師に伝えてください。

失神による転倒やケガを防ぐため、接種後はすぐに帰宅せず、30分間は背もたれがある椅子など、体重をあずけられるような場所に座り、なるべく立ち上がることを避けて、安静にして、診察室から移動する時は看護師や保護者に付き添ってもらってください。通常は、横になって安静にするだけで回復します。

主な副反応

頻度10%以上	注射部位の痛み・赤み・腫れ等
頻度1～10%未満	発熱、注射部位のかゆみ・出血・不快感・頭痛等
頻度1%未満	注射部位のしこり、手足の痛み、筋肉が硬くなる、下痢、腹痛等
頻度不明	無気力、寒気、疲労、倦怠感、血種、めまい、関節痛、筋肉痛、おう吐、吐き気、リンパ節症、蜂巣炎等

※重い副反応として、まれに、アナフィラキシー反応などの過敏症反応、ギランバレー症候群、血小板減少性紫斑病、急性散在性脳脊髄炎などが現れることがあります。

万が一、注射した場所にかぎらず、痛みやしびれ、脱力などが起こり、長くつづく場合には医師にご相談ください。

予防接種救済制度

予防接種が原因と認められた場合、国の制度である予防接種救済制度が適用になります。

世界保健機構 (WHO) ワクチン安全性諮問委員会 (GACVS) による安全性の評価の要約

- ・世界では、HPVワクチンが承認されて以降、多くの大規模で質の高い研究・調査において、懸念されるような新たな有害事象は認められていない。
- ・副反応は、アナフィラキシーおよび失神以外は認められておらず、HPVワクチンは極めて安全であると考える。
- ・重篤な有害事象の発現についても、HPVワクチンと他のワクチン接種者の間に差はみられなかった。
- ・HPVワクチンに関しては、広範な安全性のデータが揃っているにもかかわらず、依然として根拠のない主張に注目が集まり、多くの国でワクチン接種率にマイナスの影響を与え、これが真の被害をもたらすことを懸念している。
- ・予防接種プログラムにHPVワクチンを導入しているいくつかの国々では、若年女性における子宮頸部のがん病変の減少が報告されている。
- ・WHOはHPVワクチンの安全性を評価し、日本での子宮頸がんによる死亡率は増加すると予想される状況の中、勧奨中止を憂慮する旨の声明を発表している。

現在、国において積極的勧奨が差し控えられていますが、いすみ市では対象年齢の接種を希望する方に、子宮頸がん予防接種の予診票を発行しています。

対象者： 小学校6年生～高校1年生の女子
(平成15年4月2日～平成20年4月1日生まれ)

接種を希望される方

保護者が母子健康手帳を持参し、大原保健センター窓口で予診票を受け取り、医療機関に予約をし、予防接種を受けてください。

接種について検討されている方

電話か窓口にて、大原保健センターまでお問い合わせください。

ワクチン接種後も、20歳を過ぎたら子宮頸がん検診を受けましょう！

ワクチンで感染を防げないタイプのウイルスがあります。そのため、国では子宮頸がん検診を推奨しています。

いすみ市では、20歳以上の方を対象に、子宮頸がん検診を毎年実施しています。ご自身の健康管理のため、20歳になったら必ず受診しましょう。

問い合わせ 大原保健センター 電話：0470-62-1162